雨の日と藍色のコカコーラ

英語英文学科1年　井上　瞳

私が初めてその人と会ったのは降水確率二十%が見事に外れ、ため息も出ないくらいの雨が私の前に立ちはだかっていたある七月の木曜日のことだった。一ヶ月前に三年生が引退し、私達はまだぎこちなさが残る中で夏休みの大会に向けて練習していた。その日いつも通り六時半に練習を終え、七時半から始まる予備校の授業のために誰よりも早く部室を出た私を、やつは今か今かと待ちかまえていたのかもしれない。

駅へと続く道を行く誰もがお天気お姉さんに少なからず腹を立て、何人かは仕方なくビニール傘を買い、また何人かは三百八十円を惜しんで雨に濡れる覚悟を決め、肩をすくめながら足早に駅へと向かっていた。私は後者だった。ビニール傘（しかも小さい方）に三百八十円を出すことが出来ず、雨降りの五百メートルを覚悟する。それが高校二年生の私だった。

私は門を出て十メートル程歩いたところにある横断歩道の前で立ち止まり、鞄を両手で抱えながら車の流れが途切れるのを待っていた。左を見て、右を見て、また左を見て、右を見て……なかなか渡れない。雨粒を吸い込んだ髪を右耳にかけながら小さな溜息をついて顔を上げると左からの車が途絶え、右にはすぐそこに小さな軽自動車が一台、そしてずっと奥に交差点を曲がってきた市営バスが見えた。多分窒息しそうなくらい二酸化炭素が充満している。

その人は丁度いいタイミングで横断歩道に差し掛かり、私の左側に並ぶようにして止まった。そしてそのすぐ後、私の空だけ雨がやんだ。軽自動車が通り過ぎ、状況を上手く飲み込めないまま私達は揃って歩き出した。制服で同じ高校だということは分かったけれど多分学年が違うのだろう。見覚えのある顔ではなかった。しかし予期せぬ出来事に驚きを隠せずそっと盗み見た横顔は、私の知っている誰よりも美しかった。一般の日本人よりはいくらか彫が深く、瞳は横からでも分かるくらい茶色かった。耳にはリング状のピアスが二つ付いていて、なめた後の唇が何故だか凄く色っぽく見えた。私は鞄からタオルを取り出して汗の臭いに耐えながら髪の毛を拭き、セーターとスカートについた小さな雨を手で払った。

「あの、」

「こんなに水が滴ってちゃいい女が台無しだから」

長過ぎる沈黙に耐え切れなくなった私の勇気の塊でもあったその言葉を、その時梓さんは簡単に説き伏せた。ハスキーなその声は、他人が聞いたら怒っているように聞こえたかもしれない。「ありがとう……ございます」私の声があまりにも小さかったから聞こえてなかったのかもしれない。横断歩道を渡ってから駅に着くまでの五分間、私達は一言も喋らなかった。

駅のロータリーへ出るエスカレーターに乗ると梓さんは丁寧に傘をたたみ、手についた雫をハンカチで拭き取った。私の目の前で揺れる革の鞄には赤い名札がついていて、『梓』と真ん中に一文字だけが彫ってあった。

「ありがとうございました」

エスカレーターを上りきったところで、さっきよりも少しだけ大きな声で言った。「うん」とだけ答え、早足で駅ビルの方に向かって歩き出した後姿を見て私はあることに気が付いた。梓さんの左肩はほとんどびしょぬれの状態だったのだ。グレーのセーターに水溜りが出来ていた。私は自分の右肩をちらっと見ると、ありもしない水の粒達を汗の臭いが染み付いたタオルで出来るだけ丁寧に拭いた。

『梓』か……素敵な名前だなあ……下の名前は何ていうんだろう……あの人は私のこと知っているのかな……でも一体誰なんだろう……そんなことを考えていたら間違えて家に向かう電車に乗ってしまい、間に合う予定だった予備校の授業に二十分も遅刻してしまった。

私の高校では、最近は一年生でも予備校に行く子が増えた。四月に新しく来た校長先生は「学校は勉強する場です」と初日の挨拶できっぱりと言い、夏休み明けからは三年生を除いて七時間授業になることが決まっていた。去年は国公立大学の合格者が全体の二割もいたという話を聞いた時、そんな進学校に入った覚えはないと思った記憶がある。成績表で四より五の方が多ければ、面接で受かるくらいの高校だったはずなのに。

授業が終わると雨はほとんどあがっていた。小さな水溜りに見えた歪んだ自分を踏みつけようとしたけど、一瞬立ち止まってすぐにやめた。

多分藍は私のことを知らない。

入学式の朝、昇降口で式の案内を手渡し、ご入学おめでとうと書かれたコサージュを藍の胸元に付けてあげたのは私だった。あの日まで一目惚れという言葉の存在を完全に否定していた私にとって、河仲藍という人間は何の前触れもなく突如上空に出現した巨大竜巻のようなものだった。肩まで伸びたストレートの黒髪、程よく焼けた薄茶色の肌、何一つ障害物のない手、ピアニストのように細長い指、薬局で見掛けた付け爪よりも形の良い爪。優しさと強さを持ち合わせたような凛とした眉、綺麗な二重瞼の下に眠る少しだけ水分を含む瞳、ミクロ単位の狂いもないくらい左右対称の眼は笑った時に半分の大きさくらいまで細くなった。鼻のラインがこめかみから真っ直ぐ形作られ、ふっくらとした唇にはつやがあり、マネキン人形にも劣らないシャープなあごがとても魅力的だった。ワイシャツの第二ボタンの間から顔を出す鎖骨はまるで美術館に飾られた芸術作品のようで、スカートから伸びる足は細長く、ふくらはぎと足首は紺色の靴下で隠れているのが惜しいくらいだった。髪の毛の一本一本から足の爪の先まで、全て最新型のロボットによる緻密な計算が何万回も繰り返されたとしか思えなかった。神様のいたずらか、或いは神そのものか、それくらいの衝撃が走った。

「ありがとうございます」

彼女は透き通るような声で強く優しく上品に言葉を発した。彼女の体内で生産された声と脳内で創造された言葉とが喉元で一つになり、礼儀正しく並んだ歯の隙間から出て空気中で震え、私の心臓にナイフの如く鋭く突き刺さった。たった十文字のありふれた言葉が、その日私に瀕死の傷を負わせたのだ。沖縄の離島で見上げた満天の星空よりも鮮明に、彼女の笑顔は脳裏に焼きつけられた。

思い返してみれば、文化祭で『アメリカンドッグ一つ』の注文を受けたのも、合唱コンクールで銅賞を取ったクラスの代表者として藍に賞状を渡したのも私だった。二月には校内のマラソン大会で優勝し、九月には文化祭のミスコンでベストクールガールという（欲しくもない）称号を手にした。イベントが苦手な私は五キロを完走すると最後の生徒がゴールする前にさっさと帰ってしまったし、文化祭も仮病を使って

参加しなかった。こんなだから顔はおろか、名前すら知らなくても不思議じゃない。だけど私は廊下で藍を見かける度、一人で勝手に繋がりを感じていた。そしてそれと同時に、藍の存在を確かめていた。

三年生になった私は、藍への想いを捨て切れないまま夏休みを向かえようとしていた。それまで好きな英語ばかり勉強していた私は、夏休み中に日本史の基礎を固めなければどこにも受かれないと予備校の先生に言われ、本気で心配になってきていた。夏休み前最後の模試は、マーク模試で百点満点中三十六点しか取れていなくて、第一志望は絶望的だった。

そんなある日、何の見返りも求めず、女神様が私に優しく微笑みかけてくれた。その日予備校までの時間を学校の図書室で過ごした私は、七時三十五分という中途半端な時間から始まる授業に間に合うよう七時前には図書室を出た。ついさっき降り出したばかりの雨があっという間に本降りになっていて、夏の湿っぽい空気がますますじめじめとしていた。正門を過ぎてすぐ、私は雨に濡れながら横断歩道を渡ろうとしている藍に気が付いた。藍が横断歩道を渡る前に追いつけたら声をかけようと決意し、心なしか早歩きになった私の心臓は既に藍に聞こえてしまいそうなくらいだった。横断歩道に辿り着いた時、私は一体どんな顔をしていたのだろう。私は藍に傘をさしながら無言で横断歩道を渡った。何か言わなきゃ、何か言わなきゃ、何でもいいから何か言わなきゃ。何か……。

「こんなに水が滴ってちゃいい女が台無しだから」

なんて気の利かない言葉なんだろう。藍が何か言ったみたいだったけれど私の言葉の前に倒れてしまった。藍の言葉を遮るつもりはなかったのに、出来るだけ強がりでいないと自分が壊れそうな気がして箇条書きされた会社の規則みたいな口調になってしまった。全身で平然を装っていたけど、もし話しかけられたりしたらその時は上ずった声が出ていただろうし、正面から顔を覗き込まれたりしたらきっと沸騰状態だった。こんな大胆な行動に出た自分に驚くと同時に、変な印象を与えなかったか物凄く不安になった。予備校の授業中もずっと上の空で授業内容なんてろくに頭に入らず、家に帰ってからその日の復習をしようと思って開いたノートには傘の絵が書いてあるだけだった。

私は生まれてくる性別を間違ったのだろうか。それとも、好きになった人がたまたま女の子だったと解釈すればいいのだろうか。どっちにしてもこの恋は始まった瞬間に終了のゴングが鳴り響いたはずだった。世界の反対側まで聞こえるくらい大きく、そしてはっきりカンカンカンと三度。

私はいつしか男の人を完全に恋愛の対象として見なくなっていた。バイト先や駅、街角で見かける人達の中には優しくてかっこいい人や、小顔でスタイルのいい人が沢山いた。それでも私は彼らにときめくことはなく、脇の下から伸びる毛や顎の下に無造作に生える髭、腕や脚を覆い隠すそれらに嫌悪感のような気持ち悪ささえ感じるようになっていたのだ。逆に、藍の持っている全ての要素が私を魅了し誘惑していた。廊下ですれ違う度、後姿に『好きでいてごめんね』と、言葉を交わす度、視線を床に落としたまま『迷惑はかけないから』と、自分に言い聞かせるように思っていた。笑顔で話を聞きながらもネックレスが波打つ鎖骨を眺め、三番目のボタンの下を想像し、ピンク色の小さい唇に自分のものを重ねてみたいなんて考えたりもした。そのうちこの気持ちを抑えられなくなってしまうんじゃないかって、時々自分が物凄く怖くなることもあった。

そんな時、私は決まってコーラを飲んだ。部活を引退するまでは極力炭酸飲料水は飲まないようにしていたのだが（実際は炭酸飲料水を身体が受け付けてくれなかったのだが）、引退と同時に当時唯一好きだった女優さんがCMに出始め、私はめでたくコーラ解禁となった。CMは何種類かあって、蓋の開いてないコーラのペットボトルでボーリングや野球、剣道やテニス（このへんは結構無理矢理だが）をした後でキャップを空けると案の定中身がプシューっと飛び出し【大変危険ですので絶対に真似しないで下さい】という表示が画面いっぱいに映し出されるというものだった。気取らない美しさと、飾り気のない言葉と、真っ直ぐな自分を貫く彼女が大好きだった、この人みたいにもう少しわがままになってもいいのかな。もう少し欲張りになってもいいのかな。彼女はそんな風に、私を前向きな気持ちにしてくれた。自分が嫌になったり、道に迷ったり、急に孤独を感じたりした時、コーラには随分とお世話になった。

一月の終わり頃、一度だけ梓さんと駅まで一緒に帰ったことがある。その日は私の親友の優香が十七回目の誕生日を向かえた茅野宗祐にプレゼントを渡して告白し、見事付き合うことになった記念すべき日だった。私は優香の恋愛成就の話に一人で盛り上がり、その話を一方的にした後で梓さんにこんな質問をしてしまった。

「先輩は好きな人とかいないんですか？」

「まあ、いなくもない……かな」

少しだけ顔を赤くした梓さんに、私は冗談めいた声で言った。

「先輩も勇気出して好きって言ってみたらいいじゃないですか？」

梓さんは私の方をチラッと見ると、当たり前のことを言うみたいにさらりと答えた。

「『勇気』なんて三文字じゃ会いに行けないし、『好き』なんて二文字じゃ伝わらないな」

梓さんの言葉はどうしてこういちいち心に響くのだろう。どうしてこの人はこんな素敵な台詞を簡単に口にできるのだろう。

出会ったあの日と同じ道を通って駅に向かい、エスカレーターの手前で私は梓さんに聞いてみた。結構期待しながら。

「恋と愛の違いってなんだと思いますか？」

「うーん……恋は瞬間で、愛は時間のことを言うんじゃないかな」

三秒考えて出した答えが『恋は瞬間で愛は時間』だなんて、やっぱりこの人は天才だ。

梓さんの言葉にはいつも元気をもらう。『自分は自分のために、皆は皆のために。そんな時があってもいいんじゃん』これは部長に決まったことを知らせた時、皆をまとめていく自信がないと言った私に言った言葉。『藍に涙って、アップルパイにきゅうりが入ってるみたい』これは梓さんの卒業式に泣いていた私に言った言葉。『涙にはねえ、藍をブサイクにする物質が含まれてるから、最後までちゃんと出さなきゃだめだよ』これは三年生になって初めての試合（結局負けた）を、足首の捻挫のせいで最後まで戦えなかった私に言った言葉。『人が幸せって気付いた時には、もう百個くらいの幸せを気付かずに通り過ぎてたってことなんだよ』これは誕生日おめでとうメールをくれた梓さんに、いろんな人に祝ってもらえてあたしは幸せ者ですね。と返した後に送られてきた返事。梓さんは自分では日本語が苦手だとか言いながら、あたしには両手じゃ抱えきれないくらいの言葉をくれた。想い出に浸っていると、ふと中学生の頃聴いた曲に　言葉が軽すぎるから　想う人の言うことも　疑う理由もないのに　全てが嘘に聞こえる　そんなフレーズがあったのを思い出した。

言葉は面白くて優しくて温かくてミステリアスで美しいけど、でも時々すっごく残酷だ。

藍の左手の薬指に指輪があることに気付いたのは、卒業式の日に撮った写真を眺めていた時だった。藍に中学二年生の頃から付き合っている人がいることは知っていたし、最初から叶わぬ恋だということも分かっていたはずなのに、寂しくて悲しくて切なくて、それから凄く会いたくなった。まだ卒業式から二日後の夜だった。もしかしたら藍にはもう会えないのかもしれない。いや、そうじゃない。会わない方がいいんだ。会ったらまた会いたくなるし、忘れられなくなる。今度会ったら触れたくなる。そう思って藍との写真をゴミ箱に捨てようとしたけど身体が言うことを聞いてくれず、結局机の引き出しの奥の方に裏返しにして自分から隠したつもりになった。その日から、私はほとんど毎日写真を隠し続けた。

六月三日、藍が部長を務めるバレー部の引退試合があり、藍達は1回戦で姿を消すことになった。第一セットを十八―二十五で取られ、第二セットを接戦のすえに二十七―二十五で取返したのだが、体力勝負となった第三セット、控え選手の少ない藍達はボールを拾うだけで精一杯になっていた。十六―二十三から三連続ポイントを奪うもその後はなかなかスパイクが決まらず、そのまま相手に勝利を譲ってしまった。バレーボールと縁のない私は試合後の藍にかけてあげる言葉が見つからず、藍に気付かれる前に帰ろうと思ったのだが、入口でサンダルを履いていた時に背中に藍の声を受けてしまった。

「先輩……」

この声に、本当はずっとずっと会いたかったんだな。

「来てたんですか？」

「えっ、ああ、うん」

「ずっと見てたんですか？」「うん。お疲れ様」

藍は泣いてはいなかった。

「わざわざこんな遠い所まで来てくれたのに、いい試合出来なくて・・」

そこまで言って瞬きをすると、藍の左眼から涙が真っ直ぐに線を引いた。これ以上この場にいたら自分がダメになると思って、私はもう一度小さくお疲れ様を言うと後ろを振り返らずに体育館を後にした。後ろを振り返ったら私の負けだって、藍に優しい言葉をかけたりしたら私の負けだって、そう思っていたから。

門を出て五十メートル程歩くと海が見えた。行きの海は綺麗で大人しく見えたはずなのに、帰りの海の匂いと波の音は私を急に孤独にさせた。コンビニを左に見ながらわけも分からず泣き、寂しさを紛らわすために苦手なはずのコカコーラを一気飲みした。駅に着いてげっぷと咳が止まらなくなり、鼻に抜ける炭酸のガスで頭痛にまで悩まされた私はコーラを飲んだことを心底後悔し、電車が来るまでの二十分間は必死で面白いことを考えていた。汚職事件をお食事券だと勘違いしていた自分を思い出し、ウルトラマンのことを『嘘とロマン』と言った妹を思い出し、脱サラを脱・サラ金地獄だと思っていた友達を思い出し、ハンガーを弓だと言い張っていた三歳の弟を思い出し、一生懸命笑った。

電車の座席は一人で一列使っても足りるくらいで、窓から見えるのは海と森と田んぼ、それから平屋の民家が何軒かだけだった。眼を閉じて私は決めた。今日で最後にしよう。もう会うのはやめよう。藍が気付く前に消えてしまおう。自分が傷付く前に消えてしまおう。次会った時にちゃんと藍と正面から顔を合わせる自信も、いきなり抱き寄せたりしない自信も、私にはなかった。だけど私には、恋と呼べるかも分からないこの正体不明の想いに終止符を打つ自信もほんの少しだってなかったんだ。

十月、私は酔った勢いで好きでもない人と寝てしまった。初めてだとは言わなかったけど、あんなにぎこちなかったからきっと気付いていたと思う。私が痛がったせいで頂点に達することはなかったけど、私を出入りする指や入り口をまさぐる彼自身、口の中で絡み合う舌や口にくわえた彼の感触は、一週間たっても消えなかった。

だけどあの日、暗闇の中で体中に彼が染み込んでいくのを感じながら、私は全然濡れていないことに気付いていた。自分でやった方が感じる、と。私が欲しいのは直線的で筋肉質な身体ではなく、曲線的で弾力のある身体だった。布団に入って彼の唇を指先でいじりながら、最後までいけたら藍を忘れられると思ったのに、結局私は藍を好きでい続ける方を選んでしまった。たった一度の激しい痛みより、いつまで続くか分からない心の痛みに耐える方を、私は選んでしまった。本当は自分を汚したくなかっただけなのかもしれない。痛みに耐え切れず―ごめんね、ごめんね―と繰り返したけど、我慢できたかもしれない。だけど広い背中に手を回して太ももに当たるまだ元気な彼を指先でそっと撫でた時、藍の顔が一瞬頭の中をよぎった。こんなに素敵な人を前にして、こんなに上手にキスをされて、私が一線を超えられなかった理由が分かったような気がした。藍に対する私の感情は、ただの好きを超えていたのかもしれない。考えてることは、私の横にいた裸の男と一緒だった。下心に溢れていた。最低だと思った。自分が怖かった。だけどそれは、紛れもなく今の自分だった。

その日のコカ・コーラは、少しだけ彼の味がした。

一月一日、私は二時間かけて湯島天神まで藍の合格祈願に行った。そして、その日から私が藍に会うことは一度もなかった。一ヶ月が過ぎ、半年が過ぎ、一年が過ぎ、気が付くと最後に藍に会ってから六つ目の季節が終わろうとしていた。ただ、季節がいくつ変わっても、私の気持ちは変わらなかった。道に迷ったみたいに、いつまでも同じ場所に立ち止まったままだった。選択肢には、棄権することも、引き返すこともあったのに。

三年生になる前に一年間休学をしてアメリカに行くことを決めた私は、出国日を二日後に控えたその日もいつもと変わらない土曜日を過ごしていた。強いて言うなら、朝、愛媛県松山市河中町での通り魔的殺人事件のニュースを聞いて嫌な予感がしていた。藍に何か不吉なことが起こりそうな、そんな予感が。

二〇〇三年三月二三日土曜日午後一時四十六分、梓さんが死んだ。

交通事故で、病院に運ばれてまもなくだったらしい。青信号を渡ろうとしたところに信号無視の大型トラックが猛スピードで突っ込んできて、はねられた梓さんは地面に頭を強打して意識を失い救急車で病院に運ばれた。ニュースでは、信号無視をした大型トラックの運転手は飲酒運転をしており、梓さんにぶつかった後で近くのスーパーに停めてあった軽自動車に激突し、中にいた七歳の男の子にも軽傷を負わせたとのことだった。夕方のニュースでアナウンサーが梓瑞樹という名前を口にした時、私は何が起こったのかすぐには理解出来なかった。久しぶりに聞くその名前が、テレビから流れてきたのだから。

『今日午後1時頃、東京都港区の交差点で青信号を渡っていた都内の大学に通う梓瑞樹さん二十歳が信号無視の大型トラックにはねられて地面に頭などを強く打ち、病院に運ばれましたがまもなく死亡しました。横浜市在住のトラック運転手、松永陽一容疑者五十二歳は当時酒を飲んでおり、警察では業務上過失致死及び……』

体が凍りつき、全ての音が一瞬にして消えた。別人だと思いたかった。人違いだと思いたかった。梓瑞樹という名前が街中に溢れていればいいと思った。携帯電話を鞄から取り出してはみたものの、指先が震えて通話ボタンが押せず、梓さんと一番仲がよかった先輩に『瑞樹先輩の住所って分かりますか？』とメールを送ってみた。夜の十一時を過ぎても返事が来る気配はなく、私は携帯電話を握り締めたまま眠ってしまった。

次の日、朝の八時からお昼過ぎまで一生懸命笑顔を作ってスーパーでレジ打ちをした私は三時過ぎに梓さんの家を訪れた。昨日のうちに病院の霊安室から自宅に戻された梓さんは、六畳の和室で独り静かに眠っていた。

「顔、見ても、いいですか？」

首を振って下を向いた梓さんのお母さんを見て、急に身体の力が抜けてしまった。もしかしたら全部夢なんじゃないかって、テレビも病院も梓さんのお母さんも、皆嘘をついているんじゃないかって、本当は死んでなんていないんじゃないかって、心の隅っこで思ってた。自分は夢を見てるんだ、そう思いたかった。悲しくて、悲しくて、悲しくて、【悲しい】っていう感情が存在していることが嫌になるくらい悲しかった。

梓さんのお母さんに案内されて梓さんの部屋に入ると、右手の大きな本棚に私の写真が何枚か綺麗に並べられているのに気が付いた。隙間なく敷き詰められた本をバックにして、梓さんは私の隣で笑っていた。顔を赤くした体育祭の時の写真や涙目になった卒業式の日の写真も一緒に並べられている。ふと、きれいに整理された机の上で不器用に光る携帯電話が眼についた。不在着信が十五件に新着Eメールが八通もあった梓さんの携帯には、一通だけ未送信のメールがあった。宛先は【河仲藍】私だった。送信履歴の一番下にあったその保護メールは、短いけど梓さんの全てがそこにあるメールだった。

ごめんなさい。
でも世界で一番好きでした。
ごめんなさい。ごめんなさい。

人の死を、こんなにリアルに感じたのは初めてだった。人間は失ってからそのものの大切さに気付くというのは本当だ。私は左手の薬指から指輪を外し、それをポケットにしまうと堪えきれずに声を上げて泣いた。梓さんの家を出てからも、電車に乗ってからも、家に着いてからも、私の涙は枯れそうになかった。涙腺は故障してしまい、頭も心も身体も、全部修理が必要なくらい弱っていた。夜、布団を頭から被った私はふといつかの梓さんの言葉を思い出し、また泣いた。

梓さん、私まだやれますか？

私の消えそうな声は雨の音に完全にかき消された。きっとこの先もずっと、雨の日は梓さんのことを思い出してしまうんだろう。だけど梓さんが雨を降らせていると思えばいいんだ。雨は梓さんからの贈り物だって思えばいいんだ。そうだよね？梓さん。

あれから五年、私は二十四歳になった。

短大を卒業してすぐに六年間付き合っていた孝也と結婚し二児の母となった私は、今年も梓さんの命日にお墓参りに行くことにした。孝也が「ママは今日お墓参りに行くから結芽と結馬はパパとお留守番な」と言うと、結芽が少し寂しそうな顔をして私に言った。

「ママ誰のお墓に行くの？」
「ん？ママの大事な人。」
「その人ってパパより大事？」
「んー、パパの次に大事な人かな。」

「じゃぁ結芽はその人の次に大事？」

三歳なのに恐ろしいことを聞く。私は結芽の髪を撫でながら言った。

「結芽と結馬が一番大事だよ。」

バスと電車を乗り継いで三十分程で霊園に着いた。梓さんのお墓の前に立つと、やっぱり今年も泣きそうになった。五年経った今でも、呼びかけると梓さんが返事をしてくれそうな気がする。いなくなったなんて嘘だって、時々思ってしまう。

「梓さん、結芽と結馬は三歳になりました。孝也はやっと煙草やめてくれたんです。それから、真知先輩がジャックって言うイギリス人の方と結婚したんです。青い眼の子供を産んでやるんだってはりきってました。……もう五年も経つんですね。元気にしてますか？」

梓先輩も生きていたら今頃結婚して子供も出来て、幸せになっていただろうな……。手を合わせて目を閉じると、毎年甦ってくる梓さんの声が今年もまた遠くの方から響いてきた。

本当に悲しい時は涙なんて出ない。涙が出るのはまだやれる証拠だよ。

涙を拭いて、私は再び会うまでの遠い約束をした。

「さよなら、梓さん。」